審査の結果の要旨

氏名　志水宏吉

本研究は、イギリスのコンプリヘンシブ・スクールと日本の中学校における教育活動とその教育活動を構成する原理を、エスノグラフィーの手法による集約的かつ継続的な観察と記述によって分析し、イギリスと日本の学校文化の比較社会学的な考察を行っている。

第一部「学校文化の構造」においては、日本の中学校とイギリスのコンプリヘンシブ・スクールの歴史的経緯を比較した上で（第１章）、兵庫県尼崎市の公立中学校における参与観察（１９８７年―１９８９年）による考察（第２章）とコヴェントリー市のコンプリヘンシブ・スクールにおける参与観察（１９９１年―１９９２年）による考察（第３章）が展開され、日本とイギリスの前期中等教育における学校文化が教師の教育活動の構造と機能に焦点化して比較検討されている。この第一部では、中学校の学習指導、生徒指導、進路指導とコンプリヘンシブ・スクールにおけるティーチング、パストラル・ケア、キャリア・ガイダンスの三つの教育機能を相互に比較検討することによって、「標準主義」対「個性主義」、「努力主義」対「能力主義」、「競争主義」対「達成主義」、「全人主義」対「限定主義」という教師の教育活動を支えるエートスの差異とその葛藤の様態を抽出している。さらに、日本の中学校においては、学習指導と生徒指導と進路指導という三つの教育活動が「指導」という特有の概念によって統合されている点、および、成績の劣る生徒ほど教師が多大なエネルギーを注ぐ「逆トーナメント型」の教育活動が行われている点が日本の学校文化の特徴として提示されている。

第２部「学校文化の変容」では、１９９０年代半ば以降におけるイギリスと日本における学校文化の変容が、システム内的要因としてのマイノリティー・グループによる変容（第４章）、システム外的要因としての教育改革の政策による変容（第５章）に焦点化して比較されている。マイノリティーへの対応においては、生徒集団全体への指導を展開する日本の中学校と、マイノリティー固有のニーズに限定的に応えるイギリスのコンプリヘンシブ・スクールの差異が指摘され、教育改革のインパクトにおいては、コンプリヘンシブ・スクールにおける脱総合化と競争原理の導入、中学校における選択授業の導入に対する教師の戸惑いが描出されて、両国の学校文化の構造が揺らぎ変動する様態が叙述されている。そして日本の中学校教師のエートスが「指導から支援へ」と推移することによって（第６章）、学校文化における教育機能と選抜機能における構造的変化が叙述されている。

以上のように、本研究は、イギリスと日本の前期中等教育の静態と動態を集約的で精緻な調査と継続的で包括的な調査を統合して描出し、両国の学校文化の比較社会学的考察による多くの知見を提示するとともに、中等教育の実態の認識と改革の政策に貴重な示唆を提供している。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものと判断された。